

長土呂遺跡群

下聖端遺跡V

長野県佐久市長土呂 下聖端遺跡V 発掘調査報告書

2016.03

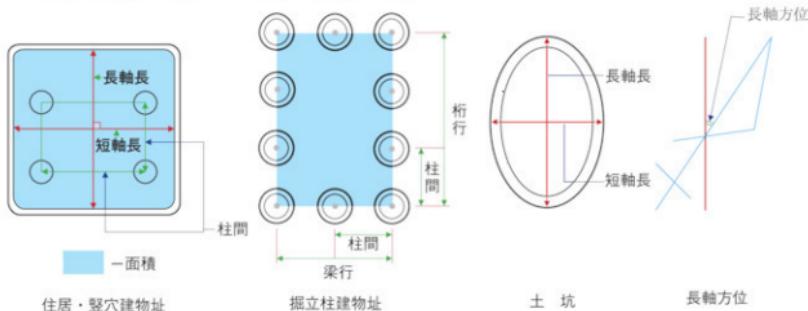
佐久市教育委員会

例 言

- 1.本書は佐久市が行う斎場関係道路整備事業1~6号線改良工事に伴う発掘調査報告書である。
- 2.調査原因者 佐久市 建設部（土木課）
- 3.調査主体者 佐久市教育委員会
- 4.調査地点 佐久市長土呂512 外
- 5.遺跡名及び期間と面積 下聖端遺跡V (NSKV) 277m²
平成27年 8月24日～9月25日（現場作業）
平成27年 9月28日～平成28年 3月31日（整理作業）
- 6.発掘・整理担当者 富沢一明
- 7.本書に掲載した出土遺物については佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1.遺構の略記号は竪穴住居址 -H、特殊遺構 -T、掘立柱建物址 -F、土坑 -D、溝状遺構 -M ピット -Pである。
- 2.挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物で土器・石器 1/4、金属製品 1/2 を基本とする。
それ以外のものは挿図中にスケールを記載した。
- 3.遺構の海拔標高は遺構ごとに統一し、水系標高をスケール上に「標高」として記した。
- 4.土層の色調は1988年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
- 5.遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。（ ）は推定値、< >は残存値である。
- 6.測量座標は世界測地系を用い、調査区グリッドは公共座標の区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
- 7.遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。



- ・遺構計測表中の（ ）は推定値、< >は残存値。数値単位はmとm²であり、その他は表中に記載した。
・遺構深度は数値の範囲を示しているもの以外は平均値である。
・住居址の形態は長軸長と短軸長の差が1割を超えたものを長方形とした。
・住居址の軸は長軸長より計測し、正方形の場合はカマド側を長軸とする。

- 8.挿図中における網掛けは以下を示す。



目 次

例言・凡例

第 I 章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

1

第2節 調査体制

2

第3節 調査日誌

2

第 II 章 遺跡の立地と環境

第1節 自然的環境

3

第2節 歴史的環境

4

第 III 章 調査の方法

第1節 調査の方法

7

第2節 基本層序

9

第3節 検出遺構・遺物の概要

9

第IV 章 調査の成果

第1節 壁穴住居址

第 2 節 特殊遺構

(1) T1号特殊遺構

16

第3節 挖立柱建物址

17

(1) F1号挖立柱建物址

17

第4節 土 坑

(1) D1号土坑

17

(2) D2号土坑

17

(3) D3号土坑

17

第5節 構状遺構

(1) M1号構状遺構

18

(2) M2号構状遺構

20

(3) M3号構状遺構

20

(4) M4号構状遺構

20

第6節 単独ピット

20

第V 章 調査のまとめ

23

図版

遺構図版

遺物図版



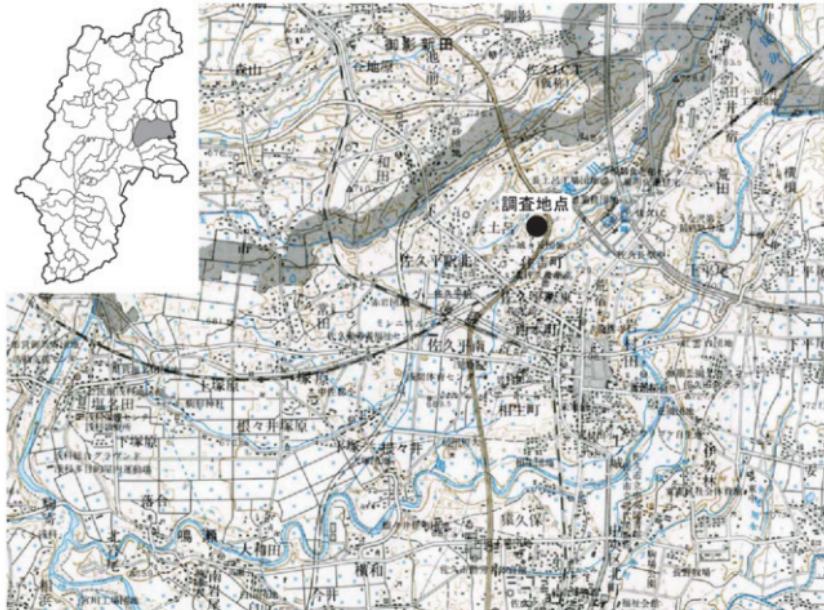
調査区を南側から望む。南側の4車線道路は国道141号

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

今回調査を行った下型端遺跡Vは長土呂遺跡群の中央部分に所在し、標高 720mを僅かに越える台地東端に位置する。調査地点の地形は北から南へとのびるいわゆる「田切」に挟まれた台地で、この台地の幅は調査地点付近で 250m を測る。遺跡周辺では当台地上で業務流通団地建設の折、約 10 万 m² の発掘調査がなされた聖原遺跡が存在する。聖原遺跡からは古墳時代後期から平安時代の集落跡が検出され、堅穴住居址 900 軒、掘立柱建物址 800 棟が確認された。出土遺物も多彩で、八稜鏡や馬鈴、六種類の皇朝十二錢、帶金具、石製印「伯万私印」などがあり、特に注目される遺物として、古代甲斐国郡名を暗文で記した仏鉢甲斐型土器が住居より出土した。また、当遺跡に隣接する国道 141 号建設の折調査された下芝宮遺跡・上大林遺跡・下聖端遺跡等からは、佐久地域では希少な古墳時代中期後葉の集落跡が発見され、籠目庄痕土器や 5 世紀代の須恵器が出士した。

今回、長土呂地区に建設された斎場周辺整備の一環として市道の改良が計画され、平成 27 年 3 月に佐久市建設部土木課より文化財保護法 94 条が佐久市教育委員会に通知され、当該地の試掘調査が行われた。結果、予定地内から遺構が発見され、工事による遺跡破壊が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなり、佐久市文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第1図 下型端遺跡V位置図 (1/50000)

第2節 調査体制

平成27年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長 樋澤 晴樹
事務局	社会教育部長	山浦 俊彦
	文化振興課長	小林 健
	企画幹	三石 建
	文化財調査係長	大塚 広樹
	文化財調査係	小林 真寿 富沢 一明 上原 学 神津 一明 生島 修平
調査担当	富沢 一明	
調査員	赤羽根 篤 赤羽根充江 飯森 成英 磐貝 律子 岩崎 重子	
	加藤ひろ美 木内 修一 小林 妙子 土屋 邦子 中澤 登	
	羽毛田利明 林 まゆみ	

第3節 調査日誌

平成27年

- 3月 13日 佐久市より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知（保護法94条第1項）
- 3月 23日 長野県教育委員会教育長より26教文 第8-326号にて通知。
- 6月 8日・7月 17日 市教育委員会文化振興課により 試掘調査
- 8月 5日 土木課より埋蔵文化財発掘調査の実施についての依頼。
- 8月 24日 長土呂遺跡群 下聖端遺跡Vとして発掘調査開始。
- 9月 25日 発掘調査終了 整理作業開始
- 12月 20日 報告書原稿を入稿する。
- 平成28年度
- 3月 31日 報告書を刊行しすべての作業を終了する。



重機による表土剥ぎ



基準点設定風景



調査風景

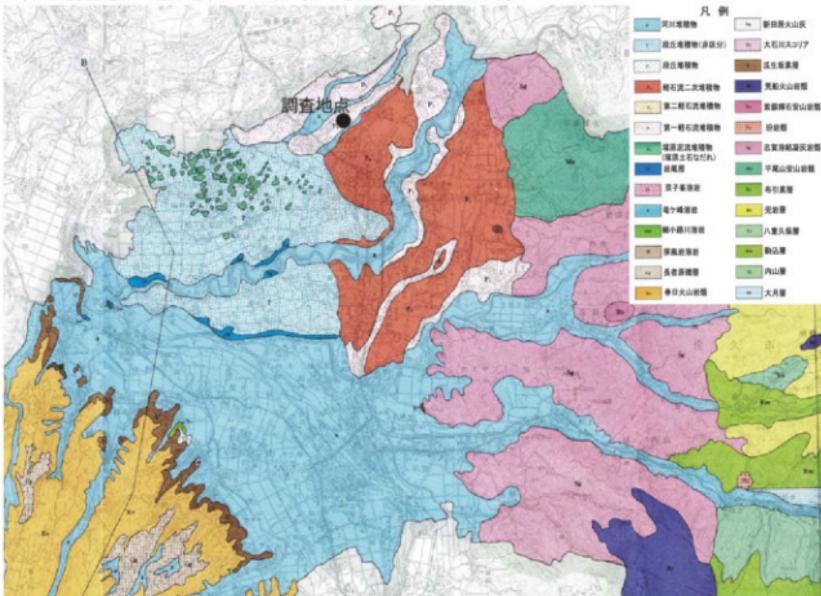
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然的環境

佐久地域は、周辺を山地や台地に囲まれた盆地状を呈する。標高は700m前後であり、夏涼しく、冬寒い高原性の気候を特徴とする。北には現在も噴煙を上げる浅間山が聳え、南には蓼科連峰が東西に連なる。東は関東山地が南北に連なり、群馬県との境をなしている。西には隆起地形である御牧原・八重原台地が広がっている。佐久盆地の中央には甲武信岳の山麓に水源を持つ千曲川が蓼科連峰や関東山地から流れ出た中小河川を集めて北流している。

このように、佐久盆地は周囲を山々に囲まれ幾多の河川に潤された大地が広がるが、地質学的にみると南北に大きく二分することができる。境界は関東山地より流れ出て、盆地のほぼ中央を西に流れる滑津川付近であり、滑津川と千曲川が合流する付近では北部地域との比高差は20m内外を示す。ここを境として北部地域は浅間山から広がる山麓が緩やかに傾斜する地形で、浅間山の噴火によって堆積した火砕流や火山灰により形成された台地が広がっている。この台地は雨水等の浸食に弱く、浅間の麓から放射状に幾筋ものいわゆる「田切り」と呼ばれる谷が伸び、切り立った崖により台地を細長く分断している。これとは対照的に、南部地域は千曲川の氾濫原とする冲積地や滑津川や志賀川といった中小河川により形成された谷口扇状地が広がっている。このため、地表下は河床疊層と沖積粘土層が広がり、現在では佐久地域の穀倉地帯となっている。

今回の調査地点は北部地域に広がる田切りに挟まれた台地上である。



第2図 佐久市地質図（佐久市志 自然編より 一部改編）

第2節 歴史的環境

今回調査した長土呂遺跡群が位置する佐久市の北部は、上信越自動車道や長野新幹線等の建設、それらに付随する開発等で 1980 年代より大規模な発掘調査が相次いだ地域である。それにより膨大な埋蔵文化財資料が蓄積されており、ここでそれらを概観したい。

まず、旧石器・縄文時代であるが、これらの時代は調査面積に比して資料が非常に希薄な時代である。本遺跡に隣接する近津遺跡群からは縄文後期の土器・石器群は出土しているが住居址は発見されていない。本調査地点でも、縄文時代中期・後期の土器片及び落とし穴状の土坑は検出されたが、住居址は検出されなかった。縄文期の集落が発見されるのは、関東山地の山裾や千曲川を挟んで蓼科山麓側であり、縄文時代に佐久平中心部の平坦地は主に狩場として利用されていたと考えられる。

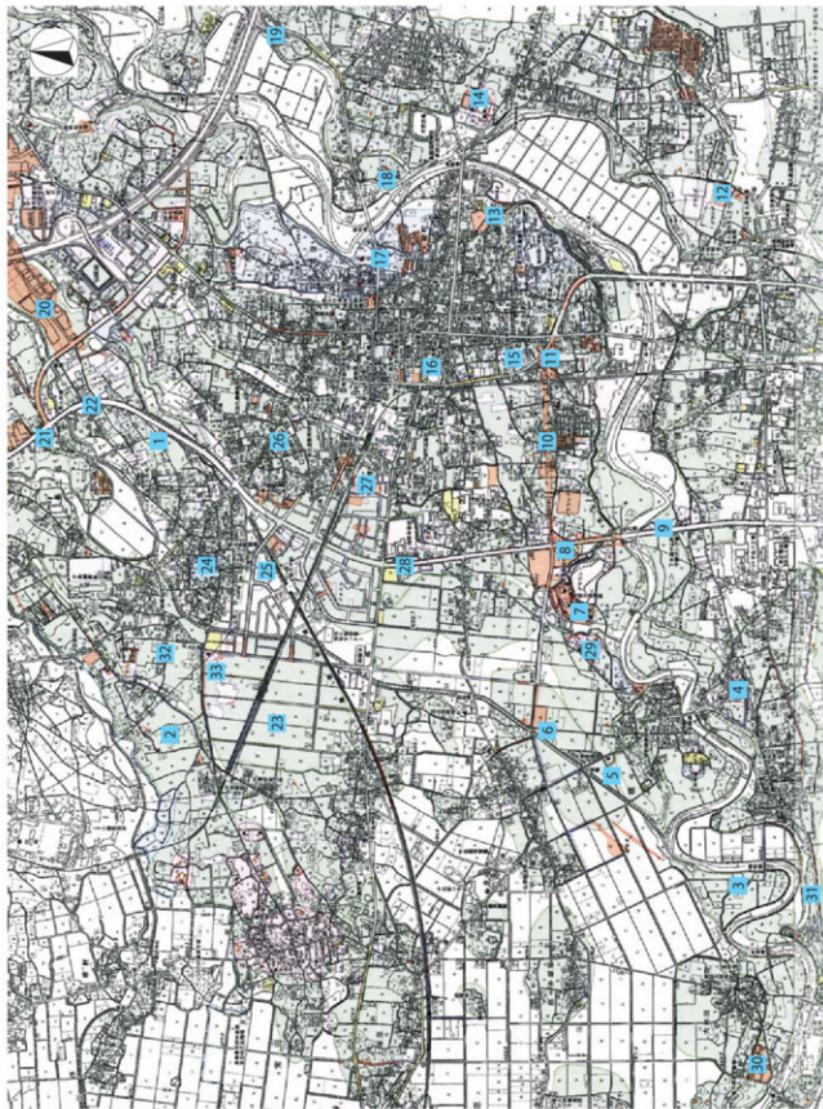
次に弥生時代では、前期と中・後期で様相が異なる。まず前期では発見された遺跡が非常に少なく、集落も発見されていない。仲田遺跡の土坑より口縁二重突唇形の壺、東大門先遺跡 II から同じく土坑より水 II 式に比定される細密条痕の甕が出土している。また、下信濃石遺跡 II からは包含層からの出土であるが、弥生前期とすべき良好な土器・石器資料が出土している。これらの遺跡はいずれも湯川沿いに立地する遺跡であり、佐久北部においては弥生前期の人々が湯川を意識して活動していたことが解る。次に中期になると遺跡数も増え集落址が確認されるようになる。湯川沿いの下流より、川原端遺跡・森平遺跡・寄塚遺跡・根々井芝宮遺跡・北西の久保遺跡・西一本柳遺跡・内陸部に円正坊遺跡がある。これらの遺跡はいずれも中期後半に比定されるが、中期後半古相に位置づけられるのは根々井芝宮遺跡のみである。このように中期に至り集落が形成されるようになっても遺跡立地は湯川沿岸を指向する傾向にあり、佐久平北部において弥生前期・中期を通して湯川が人々の生産或いは流通・移動等の諸々の活動において重要な要素を担っていたことが解る。後期になると集落は湯川沿岸より内陸部に進出するようになる。北から近津遺跡・宮の前遺跡・周防畠遺跡・上直路遺跡・円正坊遺跡・西一本柳遺跡・西一里塚遺跡などがあげられる。これらの遺跡は田切地形が消滅し、濁川により形成された低地を取り囲むように立地し、佐久平北部における稲作生産の本格的な導入を示唆している。また、当該時期の遺跡からは遺構として西近津遺跡より国内で最大級となる 18×9.5m の堅穴住居址が発見されたり、上直路遺跡からは屋内埋葬という特異な形態の土坑墓内より、埋葬者腕に装着された状態で銅鏡 15 本が発見されている。

次の古墳時代前期は弥生後期の集落展開に比べ、規模が非常に縮小し立地も限定的となる。湯川沿いの小さな平地や田切台地でも縁辺など、弥生後期に開発した水田地帯を放棄するような状態である。つづく中期前半では、当該期に比定される遺跡が佐久地域において北西の久保遺跡のみであり、前期にもまして遺跡数が激減する時期である。中期前半は他地域においても遺跡数が減少するが、佐久地域の少なさは異常である。これとは対照的に中期後半から後期の所謂、5世紀後半から6世紀にかけての遺跡数の増加は目を見張るものがある。特に北部においては、弥生後期に集落が展開した地域とともに、新たに田切台地の内陸部まで集落が広がっていく。特に上聖端遺跡・芝宮遺跡・聖原遺跡といった遺跡では累積で 100 軒単位の集落が形成されている。この現象は佐久平において、5世紀後半以降の集落誕生の理由が大きく変わった。或いは加わったことを意味する。一つの可能性としては、水田経営に適さない高燥台地の内陸にあえて集落を展開するという事は集落維持のための生産基盤を牧経営等に置いた結果とも考えられる。

統く奈良時代は古墳後期と同じような場所に集落が展開し、生活・生産活動の継続性が見て取れる。平安時代になると、集落内の住居址数は増すが、住居は小型化が顕著であり、平安時代後半には散村化の傾向がある。また、近年に周防畠遺跡群付近の調査事例で「大井」の墨書や刻書が記載された土器が多く出土し、古代「大井郷」の核地域であろうことが推測されている。

その後、鎌倉時代になると、甲斐源氏の加々美遠光が信濃守となり、その子小笠原長清の七男朝光が大井莊に土着し、大井氏を名乗るようになる。この地域は大井氏により発展し、『四隅譜載』によれば「その脇わい国府にまされり」と例えられる隆盛を誇った。これらの関連遺跡としては現岩村田市街地付近に集中し、苑池の跡が発見された柳堂遺跡や龍雲寺との関連が推定される下信濃石遺跡・漆工房跡と考えられる北一本柳遺跡・また、大井氏の居城と考えられている大井城址などがある。

近世になってからは、地域内を「中山道」が通過し、それに伴う宿場整備で岩村田宿は繁栄する。特に岩村田は佐久甲州街道が通り、北国街道も近く中世の隆盛を彷彿とさせる状態であった。町屋調査としては中山道沿いの中宿遺跡等があげられる。以上、各時代の概観である。



第3図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡群名	遺跡名	所在地	検出遺構	報告書
1	長土呂遺跡群	下型端遺跡V	長土呂		本報告書
2	近津遺跡群		長土呂字西近津	堅穴住605(掘文～平安)、掘立80、土坑3、周溝墓13	県調査
3	森平遺跡群		横木字森平	堅穴住(弥生中期1)、周溝墓1、環濠、溝3、配石遺構2	県調査
4	宮の上遺跡群	根ヶ井芝宮遺跡	根ヶ井字芝宮	堅穴住(弥生43・古墳3・平安14)、掘立3、土坑27、溝5	第49集
5	根ヶ井大塚古墳		根ヶ井字大塚	方形埴輪墓1	年報9
6	西一里塚遺跡群	西一里塚遺跡	岩村田字西一里塚	堅穴住(弥生後期11)、周溝墓1、環濠、土坑7、溝6	
7	岩村田遺跡群	北西の久保遺跡	岩村田字北西ノ保	堅穴住(弥生中期91・弥生後期38・古墳中期20)	
		西一本柳遺跡Ⅲ・IV	岩村田字西一本柳	堅穴住201(弥生～平安)、掘立45、土坑12、溝11	第73集
		西一本柳遺跡Ⅴ・VI	岩村田字上植田	堅穴住(弥生中期3・弥生後期1・古墳後期2・奈良1)、溝	第91集
		西一本柳遺跡VII	岩村田字西一本柳	堅穴住(弥生中期1)、後期2・古墳後期4・奈良16・平安9、掘立5、土坑8、溝6	年報8
		西一本柳遺跡VIII	岩村田字下植田	堅穴住(弥生中期9・弥生後期7・古墳中期6・古墳後期42・奈良16・平安9・不明2)、掘立30、土坑51、溝13	第109集
		西一本柳遺跡IX	岩村田字西一本柳	堅穴住(古墳後期16・奈良1・平安2・堅穴状2)、掘立9、土坑12	第113集
		西一本柳遺跡X	岩村田字西一本柳	堅穴住(弥生中期4・弥生後期12・古墳中期12・古墳後期15・奈良21・平安9・不明2)、掘立14、土坑19、溝14	年報14
8	岩村田遺跡群	西一本柳遺跡 XI	岩村田字下植田	堅穴住(弥生中期1・弥生後期1)、溝	年報13
		西一本柳遺跡 XII	岩村田字下植田	堅穴住(古墳後期17・奈良1・堅穴状1・古墳後期6)、掘立2	第125集
		西一本柳遺跡 XIII	岩村田字下植田	堅穴住(弥生中期13・弥生後期8・古墳中期2・古墳後期2・奈良2・平安1・不明8)、掘立5	第139集
		西一本柳遺跡 XIV	岩村田字上植田	堅穴住(弥生中期17・後期17・古墳中期3・後期7・奈11)、掘立10、土坑16、溝13	第175集
		西一本柳遺跡 XV	岩村田字常木上	堅穴住(弥生中期3・後期3・古墳後期2・奈・平5)、掘立3、土坑5	第154集
		西一本柳遺跡 XVI	岩村田字西一本柳	堅穴住(弥生中期12・後期1・古墳後期4・奈良1)、掘立6、溝3	第160集
		西一本柳遺跡 XVII	岩村田字西一本柳	堅穴住(弥生中期1)・後期2・奈良2)、溝	第169集
9	寺畠遺跡群	仲田遺跡	銀久保字仲田	堅穴住(古墳中頃4・後期6・奈良10・平安6)、掘立11、土坑6、H15より花弁双蝶八花鍵出土	第66集
		北一本柳遺跡 II	岩村田字北一本	堅穴住4、土壤墓1、溝2	年報14
10	岩村田遺跡群	北一本柳遺跡 III	岩村田字北一本	堅穴住(弥生後期48・古墳後期11・中世57)、掘立13、土坑310、溝32	第175集
		北一本柳遺跡 IV	岩村田字北一本	堅穴住3、溝2	第158集
11	岩村田遺跡群	東大門先遺跡 II	岩村田字東大門先	堅穴住(古墳後期2・奈良1・平安15)、掘立21、土坑9、溝10	第175集
12	野馬塚遺跡群	野馬塚遺跡 II・III	猿久保字野馬塚	堅穴住1、堅穴状遺構17、掘立3、土坑234	第170集
13		下信石遺跡	岩村田字仁王前	寺院闡通1・堅穴状遺構10、土坑47、古窯戸灰軸水溝出土	第134集
14		蛇塚古墳	安原字蛇塚	後期古墳1基、堅穴住3、掘立1	第78集
15	岩村田遺跡群	聴覚音堂遺跡	岩村田字聴覚音堂	堅穴住(平安1・中世27)、土坑170、土壤墓4、掘立1	第70集
16	岩村田遺跡群	柳原遺跡	岩村田字柳原	堅穴住(弥生後期2・平安1・中世33)、掘立22、土坑203、周溝墓3、池	第85集
17		大井城址	岩村田字古城	堅穴住(古墳後期15・中世54)、掘立3、土坑285	
18		下小平遺跡	岩村田字下小平	堅穴住(弥生後期1)、古墳後期1)、方形周溝墓2	
19		腰巻遺跡	上平尾字腰巻	堅穴住(弥生後期1)・古墳前期4・平安2)、溝4	
20	長土呂遺跡群	聖原遺跡	長土呂字聖原	堅穴住(古墳後期15・奈良・平663)、掘立69、土坑370、溝40	第103集～
21	芝宮遺跡群	下芝宮遺跡 I～IV	長土呂字下芝宮	堅穴住(古墳中期5・後期2・平安2)、掘立6	第9集
22	長土呂遺跡群	下上玉端遺跡 I・II	長土呂字下聖端	堅穴住(弥生後期1・古墳中期3・後期25・奈良1・平安15)、掘立18	第9集
23	周防堀遺跡群		長土呂	堅穴住92(弥生～平安)、掘立9、円形周溝墓15、土坑422	県調査
24	長土呂遺跡群	長土呂遺址	長土呂	中世遺址	
25	長土呂遺跡群	下伯母塚遺跡	長土呂字下伯母塚	堅穴住(弥生後期9)、溝、銅鏡	第110集
26	枇杷板遺跡群	上直路遺跡	岩村田字上直路	堅穴住(弥生後期2)、銅鏡11	年報5
27	円正坊遺跡群	円正坊遺跡 II	岩村田字円正坊	堅穴住(弥生中期2・弥生後期1・古墳後期2・平安2)、掘立1、古墳1、土坑8	第53集
		円正坊遺跡 IV	岩村田字円正坊	堅穴住(古墳中期7・後期23・平安4)、方形・円形周溝墓10	第102集
		円正坊遺跡 VI	岩村田字円正坊	堅穴住37、掘立4、壇帽墓1、土坑26	年報15
		円正坊遺跡 VII	岩村田字円正坊	堅穴住(弥生～平安41)、掘立2、土坑11、溝3、円形周溝墓1	第185集
28	岩村田遺跡群	松の木遺跡 I・II	岩村田字松の木	堅穴住(弥生～古墳10)、掘立1、土坑1、溝6	第91集
29	鳴沢遺跡群	五里田遺跡	根ヶ井字五里田	堅穴住(弥生中期43)、周溝墓5、古墳址2、土坑37	第74集
30	大和田遺跡群	川原堆遺跡	鳴鹿字川原端	堅穴住(弥生中～後期13・古墳49)、掘立20、土坑22、溝24	第89集
31	寄宿遺跡群	寄宿遺跡	横木字寄宿	堅穴住13(弥生中期後半・古墳前期)、掘立6、土坑17	第157集
32	周防堀遺跡群	宮の前遺跡 I・II他	長土呂字宮の前	堅穴住187(弥生後期～平安)、堅穴59、土坑183	第198集
33	長土呂遺跡群	大豆田遺跡 IV	長土呂	堅穴住26(弥生後期～平安)、堅穴33、土坑139、溝76	第229集

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 調査の方法

遺跡名・調査区

遺跡名は、佐久市詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、下聖端遺跡Vとした。ローマ数字は調査次数である。

調査区を網羅するように、国家座標に沿って40×40mの区画を設定し、北よりローマ数字を付した。この40mの区画は北東隅を起点に4mの各グリッドを設定した。

遺跡略記号・遺構略記号

遺跡略記号は以下の決まりに従い付けられている。

N=哥十号

○アルファベット3文字の2番目は遺跡群名のローマ字表記の頭文字である。

K-工作室

○アルファベット3文字の3番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。

V

○末尾のローマ数字は発掘調査回数を表す。

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

H=住居址（堅穴住居址である。現在のところ佐久市内では明確な平地住居は確認されていない。）

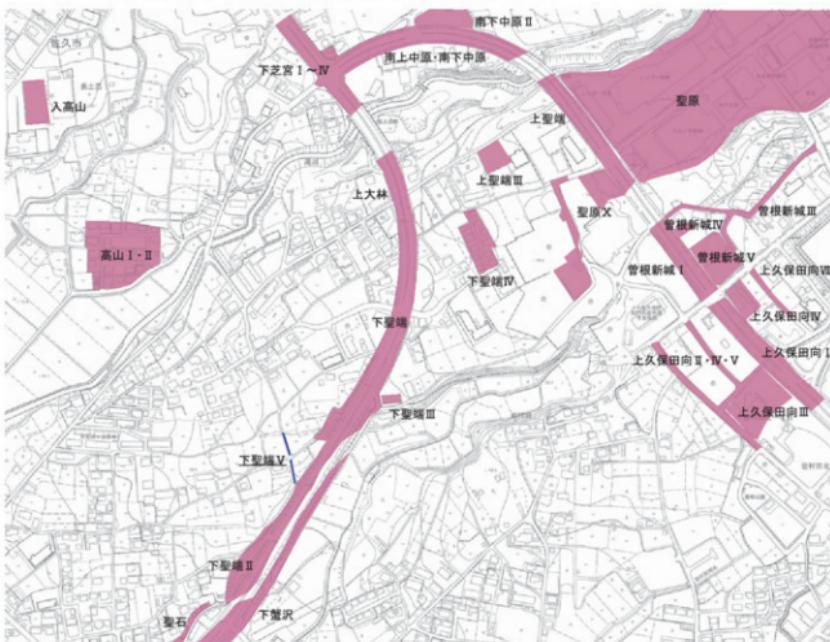
F=据立柱建物址

M=溝状遺構

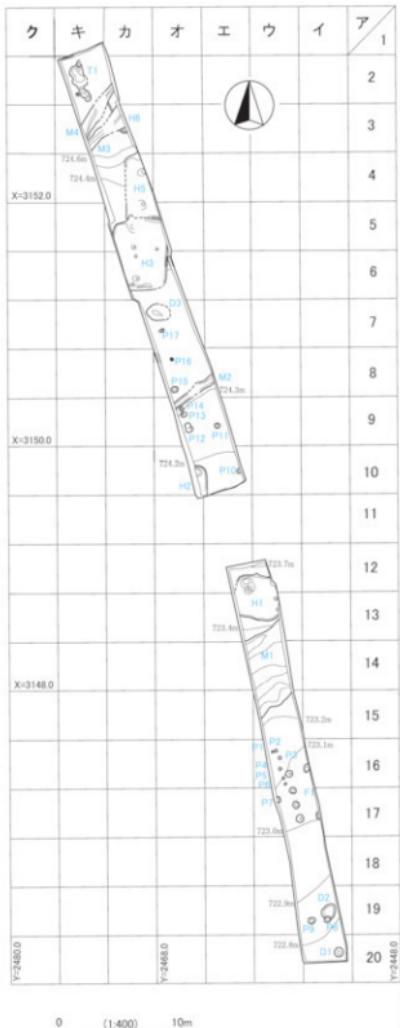
D=土坑(陷穴、貯藏穴等)

T=特殊遺構

P=ピット（柱状のものを建てたと思われる。多くは小径の掘り込み）



第4図 調査遺跡位置図



第5図 下聖端遺跡V全体図

遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は4分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNo.を付け3次元の記録を行い取り上げた。

土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。ピットも土坑と同様であるが、遺物は遺構No.で一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した造り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

写真

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真是デジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物の接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

図面は遺構を1/40で修正し、仮図版を作成した。遺物は1/1で実測し、1/2で仮図版を作成した。

報告書

文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

第2節 基本層序

本調査区の土層は基本的にI～V層に分層される。III層の砂やシルトを含む灰黄褐色土は調査区中央から北側にかけて堆積が確認でき、IV層の黒褐色土は調査区南端では堆積が確認できず、I層の表土下はV層ローム層となった。

遺構確認面は時期ごとに異なり、古墳時代の遺構はIV層上面で確認され、平安時代の遺構はIII層上面より掘り込みが確認できた。

このことは周辺の試掘調査成果でも確認されており、遺跡周辺に堆積が確認できるIII層は平安時代以前に形成された層であることが解る。

I層 10YR7/2 にぶい黄橙色土

表土

II層 10YR5/2 灰黄褐色土

III層 10YR4/2 灰黄褐色土

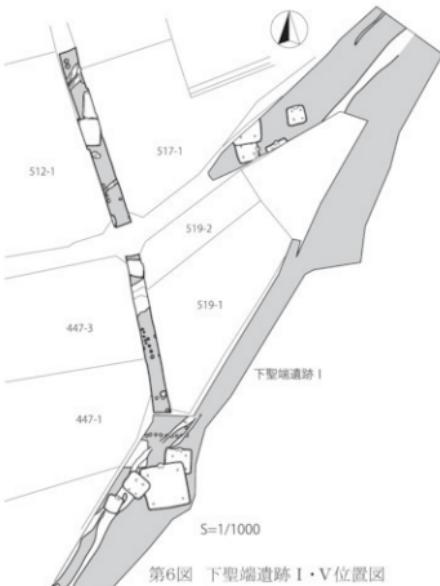
砂や褐色シルトを含む

IV層 10YR3/1 黒褐色土

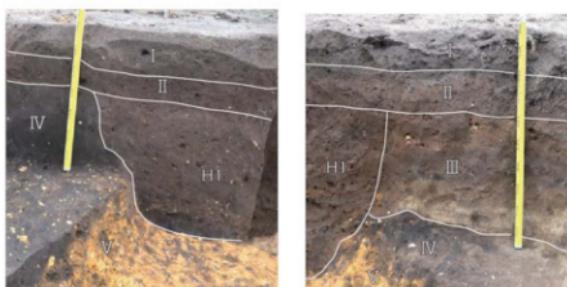
しまり・粘質がある

V層 10YR6/8 明黄褐色土

ローム層 (Pl)



第6図 下聖端遺跡 I・V位置図



第3節 検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構	堅穴住居址	5軒(古墳時代中期・平安時代)	特殊遺構	1基	掘立柱建物址	1棟
溝状遺構	4本	土坑	3基	単独ピット		

遺物 繩文土器(中期)、石器類(石礫・敲き石)土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品(鉄鑓・釘)

第IV章 調査の成果

第1節 積穴住居址

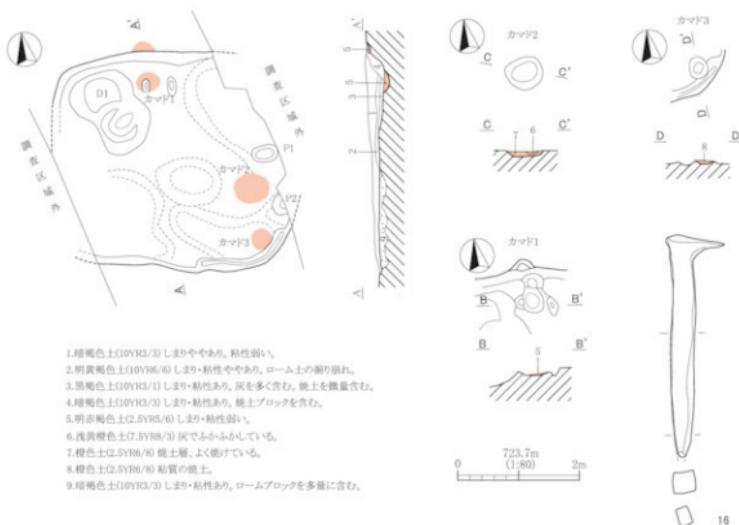
(1) H1号住居址

本址は調査区中央のウ-12・13、エ-12・13Grで検出された。形態は方形と考えられるが東西側が調査区外となり不明である。規模は、長軸が検出長4.21m・短軸が東西で3.30mである。床面積は推定で12.2m²を測る。壁深さは北西コーナーで最大0.21mを測る。住居住主軸方位はほぼNを示す。床は全体に硬質で、特にカマド前面と住居中央部は顕著であった。

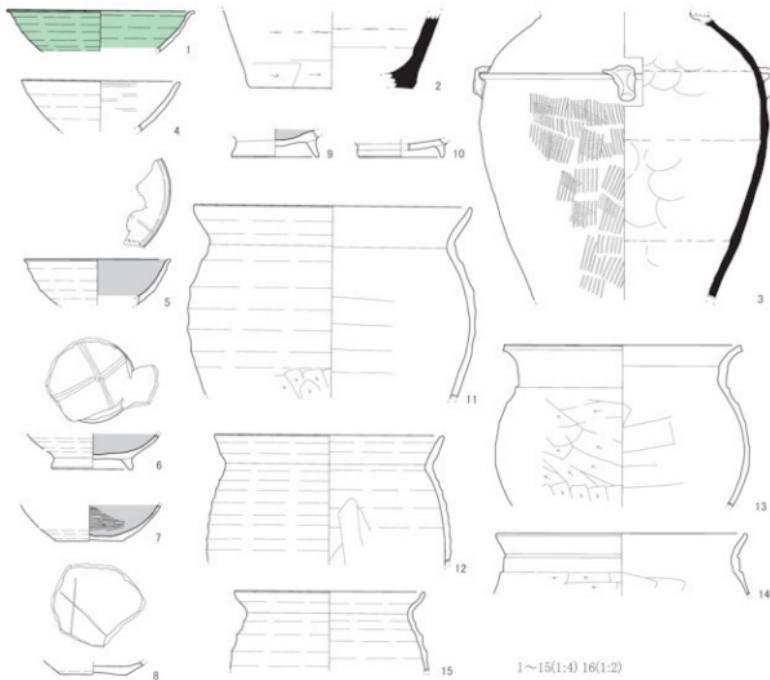
カマドは住居址北壁に検出された。形態は煙道がわずかに住居壁より飛び出すタイプで、袖等は確認されなかつたが、火床部と掘方は確認できた。また、本址からは住居南東コーナー部分で火床部のようなく焼けた焼土範囲が2箇所確認された。いずれも掘り込みをもつもので、或いは住居南東コーナーに構築されるカマドの痕跡の可能性がある。本址からはピットが2か所検出された。規模はP1が径0.4m・深さ0.1m、P2が径0.3m・深さ0.1mを測る。また、床下より土坑状の掘り込みが検出され、規模は長軸1.4m、短軸1.04m、深さ0.59mを測る。

本址からの出土遺物は覆土を中心に多くあった。16点を図示した。1と10は灰釉陶器碗の口縁部と高台部の破片である。1の釉は刷毛掛けである。2と3は須恵器壺の破片で同一個体と考えられるが接合関係はない。いわゆる「凸帶文付四耳壺」である。外面は叩き目が残り、内面はナデが施されている。4～9は土師器碗と壺である。内面を黒色処理したものと、しないものがある。また、ミガキだけのものと、ミガキによる暗文が施されたものがある。8は内面に焼成後のヘラ記号「×」が施されている。11～15は土師器壺で、11・12・15はいわゆる「ロクロ甕」、13・14は「武藏甕」の範疇としてとらえられる。16は鉄製品の角釘と考えられるが、覆土上層からの出土であり、本址に伴わない可能性がある。

これらの出土遺物から、本址は9世紀後半から10世紀前半に位置づけられると考える。



第7図 H1号住居址及び出土遺物実測図

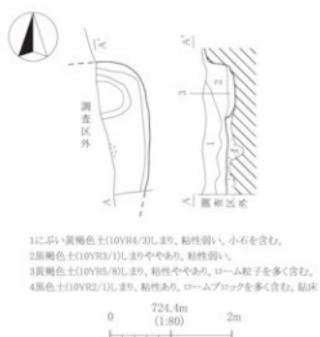


第8図 H1号住居址出土遺物実測図

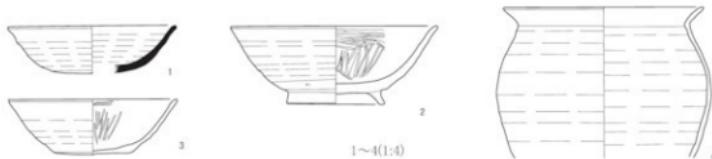
(2) H2号住居址

本址は調査区中央のエ-10、オ-10Grで検出された。形態は方形と考えられるが南側と西側のほとんどが調査区外となり不明である。規模は、長軸が検出長1.9m・短軸が東西で0.6mである。床面積は検出部分で1.2m²を測る。壁深さは北側で最大0.37mを測る。住居住主方位は推定でN-8.5°-Wを示す。床は全体に軟質で、全体に貼床が施されていた。検出された部分にはカマドや柱穴は無かったが、北側で土坑状の浅い掘り込みが検出され、掘方段階にピットが検出された。

本址からの出土遺物は少量であったが、4点を図示した。1は須恵器壺、2は土師器碗、3は土師器壺、4は土師器ロクロ甕である。これらから本址は9世紀後半の所産と考えられる。



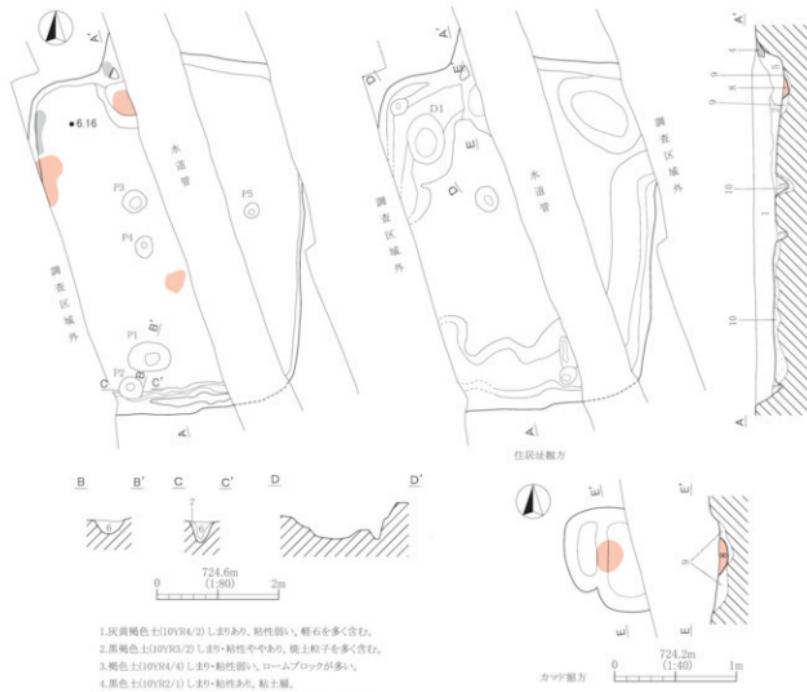
第9図 H2号住居址実測図



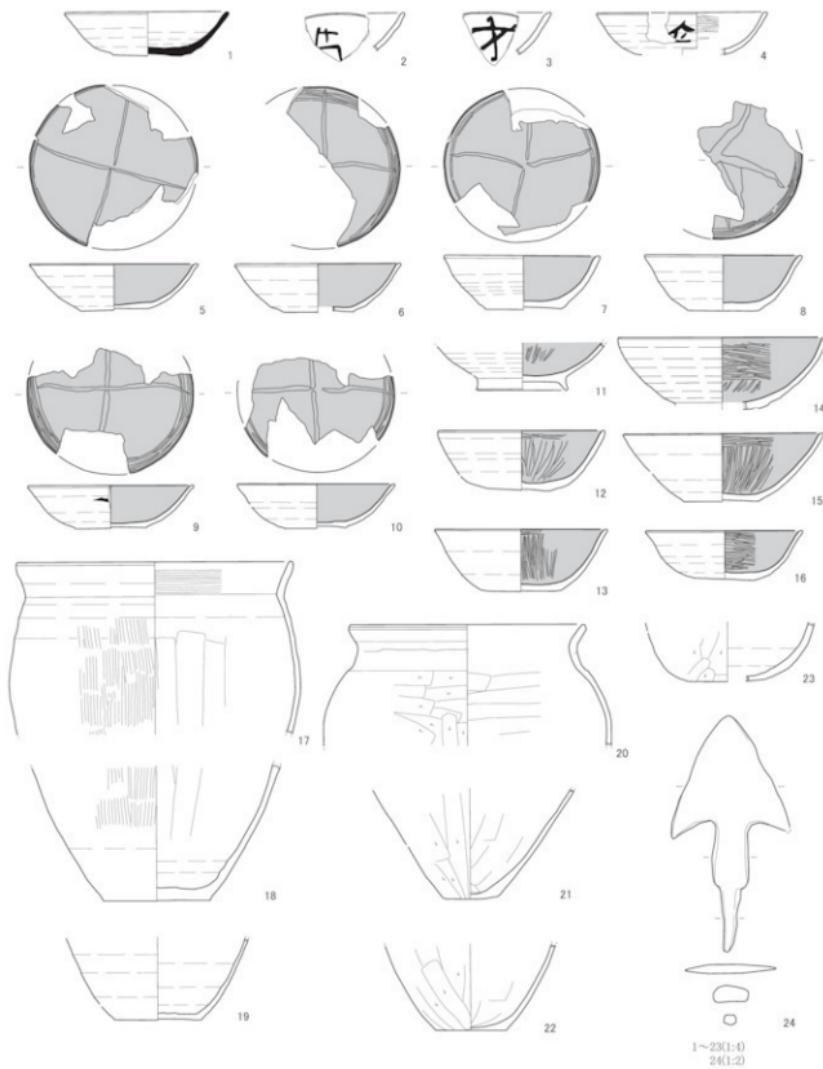
第10図 H2号住居址出土遺物実測図

(3) H3号住居址

本址は調査区中央北よりのオ-5・6、カ-5・6Grで検出された。形態は長方形と考えられるが北東コーナーと南西コーナーが調査区外となる。規模は、南北長が5.1m、東西長が4.3mを測る。床面積は推定部分も含め21.7m²を測る。壁深さは北西コーナーで最大0.31mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、南が頗著である。



第11図 H3号住居址実測図



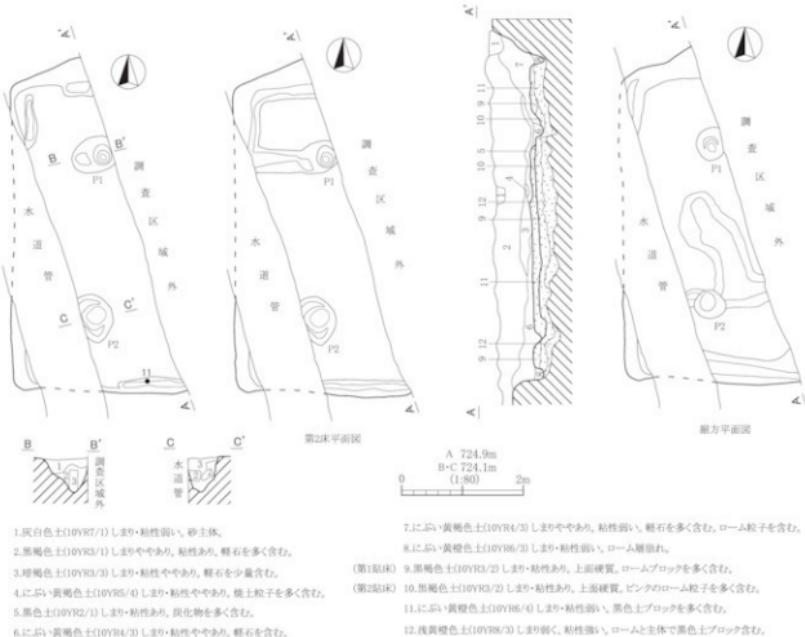
第12図 H3号住居址出土遺物実測図

住居主軸方位はN-3°-Eを示す。床は全体に軟質で、全体に貼床が施されていた。南壁中央には壁溝が巡る。ピットは5か所検出され、各ピットの規模はP1が径0.6m・深さ0.31m、P2が径0.38m・深さ0.63m、P3が径0.4m・深さ0.18m、P4が径0.36m・深さ0.21m、P5が径0.38m・深さ0.29mを測る。本址の掘方は南壁と東壁が一段深く掘り込まれている。また、北西コーナーには円形の土坑状の掘り込みが確認され、H1号住居址と同じ様相を示している。

カマドは住居址北壁西よりで検出された。中央部を下水道管により削平されており、詳細は不明であるが煙道部と火床部の一部が検出された。形態は煙道が住居址壁よりも飛び出すタイプであり、一部に粘土を構築土として使用していた。礫等は確認されなかった。また、住居西側壁よりから焼土と粘土塊が確認された。

本址からの遺物は覆土からの出土物が多かったが、24点を図示した。1は須恵器壺である。南壁よりの床面上から出土した。底部は回転糸切り離してある。2~4は土師器の片断である。いずれも体部表面に墨書が確認できるが、欠損部もあるため判読の確定はできないが、3は「才」、4は「介一」の可能性がある。5~16は内面黒色処理を施した土師器壺か碗である。また、5~10は内面見込み部にミガキによる「×」印の暗文が施されている。17~23は土師器甕である。17と18は同一個体と考えられる。ロクロ成形の後に刷毛目の残るナデが行われている。19と23は「ロクロ甕」、20~22は「武藏甕」である。24は短頸の鉄鎌である。ほぼ完形で西壁よりの覆土中から出土している。

本址はこれらの出土遺物から9世紀後半から10世紀前半の構築に位置づけられると考える。



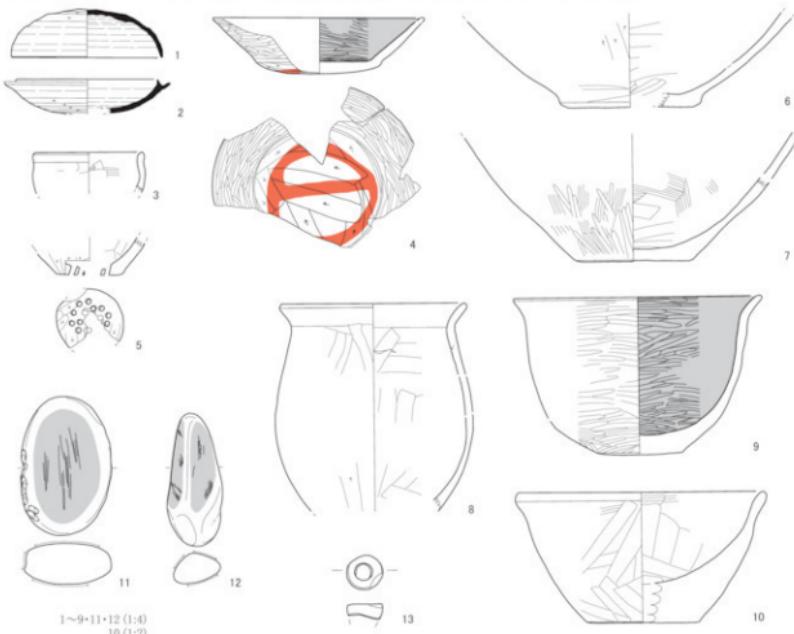
第13図 H5号住居址実測図

(4) H5号住居址

本址は調査区北よりのオ-5、カ-4・5Grで検出された。形態は方形と考えられるが東側が調査区外となり不明である。規模は、長軸が西壁で検出長4.82m・短軸が南壁で検出長2.80mである。床面積は検出部分で8.9m²を測る。壁深さは最大で1.35mを測る。住居主軸方位は推定でN-17°-Wを示す。床は全体に硬質で、全体に貼床が施されていた。特に、貼床は張替が確認され、第二床として捉えた部分では柱穴と西壁を結ぶ間仕切り溝も検出された。壁溝は南壁と西壁の一部に巡っていた。ピットは主柱穴と考えられる2か所が確認できた。各ピットの規模はP1が径0.6m・深さ0.6m、P2が径0.8m・深さ0.6mを測る。柱間の距離は2.5mを測る。

本址からの出土遺物は覆土からのもののが多かった。図示できたものは13点である。1と2は須恵器の坏身と蓋である。いずれも欠損をしているが蓋身セットとして捉えられる。陶邑編年のTK43平行に比定可能か。3は小型の土師器鉢で、底は欠損するが丸底になるタイプと考えられる。4は土師器坏で底部ヘラ削り、体部内外面を丁寧なミガキを施している。また、内面は黒色処理、底部外面には記号状の赤彩が確認できる。この類例としては長土呂遺跡群聖原遺跡から、同じく古墳時代後期の坏に記号と考えられる赤彩された模様が確認できるものがある。5は多孔の瓶である。孔はいずれも焼成前のものである。6と7は壺の底部である。7は丁寧なミガキが施されている。8は土師器壺で、いわゆる「胸張壺」と呼ばれる最大径を胴部下半に有するタイプの壺である。9は内面黒色処理された土師器鉢である。10はミニチュア土器の鉢と考えられる。11は側面に叩き痕が残る叩き石、12は磨り石である。13は小型の白玉で覆土中から出土した。

本址は、これらからの出土遺物から古墳時代後期・6世紀後半に位置づけられる。



第14図 H5号住居址及び出土遺物実測図

(5) H6号住居址

本址は調査区北端のカ-2・3Grで検出された。形態は方形と考えられるが東側が調査区外となり不明である。また、北壁はM4号溝状遺構によって削平されている。床面積は検出部分で1.7m²を測る。壁深さは西壁で最大0.46mを測る。主軸方位は推定でN-25°-Eを示す。床は全体に硬質で、全体に貼床が施されていた。検出された壁部分には壁溝が巡っていた。

本址からの出土遺物は少量で図示できるものは無かったが、古墳時代中期の土師器壺の口縁部が覆土中より出土している。これらから不確実ではあるが本址は古墳時代中期の所産と考えられる。

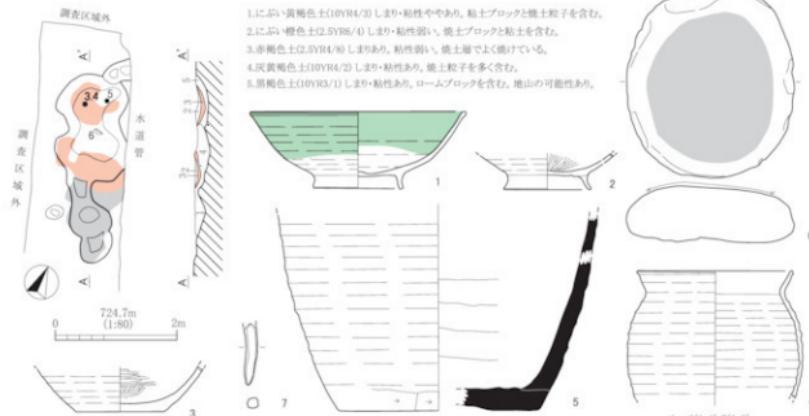
第2節 特殊遺構

(1) T1号特殊遺構

本址は調査区北端のキ-2Grで検出された。形態は不整形で、南北に長軸を持つ。規模は、南北の長軸が3.15m、短軸が東西で1.18mである。深さは最大0.26mを測る。土坑状の掘り込みは、緩やかな碗状の掘り込みで、2か所に顕著な焼土範囲が確認できた。この焼土はよく焼けており、周辺部も比熱していることから、この場での燃焼が考えられる。また、焼土の南側には薄く粘土が広がっていた。

本址からの出土遺物は焼土に混ざって多く出土し、H3号住居址と接合関係が確認されたものが多い。1は灰釉陶器碗であり、釉は刷毛ぬりである。2は土師器碗、3は土師器壺である。4は小型の土師器ロクロ甕、5は須恵器甕の底部である。6は叩き石で、7は釘状の鉄製品である。

本址はH3号住居址の出土遺物と接合関係にあり、住居址との距離などを考慮すると、H3号住居址に伴う屋外炉的な性格の遺構と捉えられる。



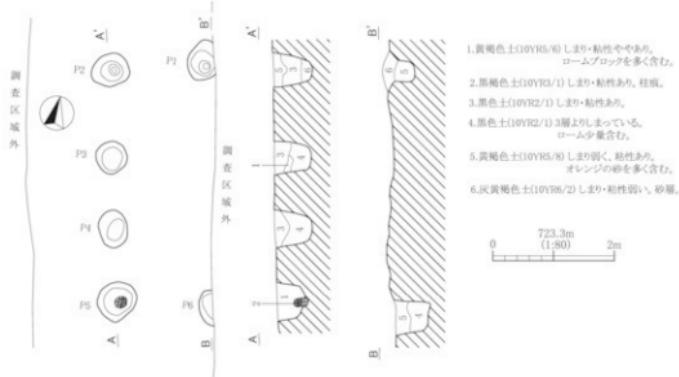
第16図 T1号特殊遺構及び出土遺物実測図

第3節 掘立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址

本址は調査区南端のイー16・17、ウー16・17Grで検出された。形態は側柱式の建物址と考えられるが、東側が調査区外となり全体の規模は不明である。柱間の規模はP1-P2間が1.52m、P2-P3間が1.42m、P5-P6間が1.50m、P3-P4間が1.16mを測る。各ピットの大きさはP1が径0.66m・深さ0.59m、P2が径0.6m・深さ0.72m、P3が径0.52m・深さ0.63m、P4が径0.62m・深さ0.62m、P5が径0.64m・深さ0.53m、P6が径0.58m・深さ0.47mを測る。主軸方位はN-14°-Wを示す。

本址からの出土遺物は少量であり、図示できるものはなかったが、P2から土師器甕片と坏片が各1点、P3から須恵器甕片、土師器甕片、土師器の内面黒色処理坏片がそれぞれ出土している。



第17図 F1号掘立柱建物址実測図

第4節 土 坑

(1) D1号土坑

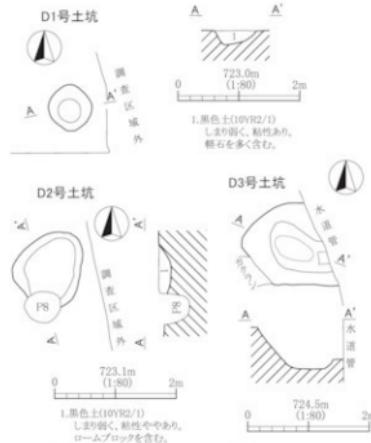
本址は調査区南端のイー20Grで検出された。形態は円形で、規模は径0.78m・深さ0.21mを測る。覆土は自然堆積である。本址からの出土遺物は無かった。

(2) D2号土坑

本址は調査区南端のイー19Grで検出された。形態は不整形で、規模は径1.22m・深さ0.21mを測る。P8と重複関係にあり、本址の方が古い。覆土は自然堆積である。本址からの出土遺物は土師器甕片が1点あったのみである。

(3) D3号土坑

本址は調査区中央のオー7、カー7Grで検出された。形態は不整形で、規模は長軸1.41m・深さ0.66mを測る。覆土は自然堆積であった。本址からの出土遺物は無かった。



第18図 D1~3号土坑実測図

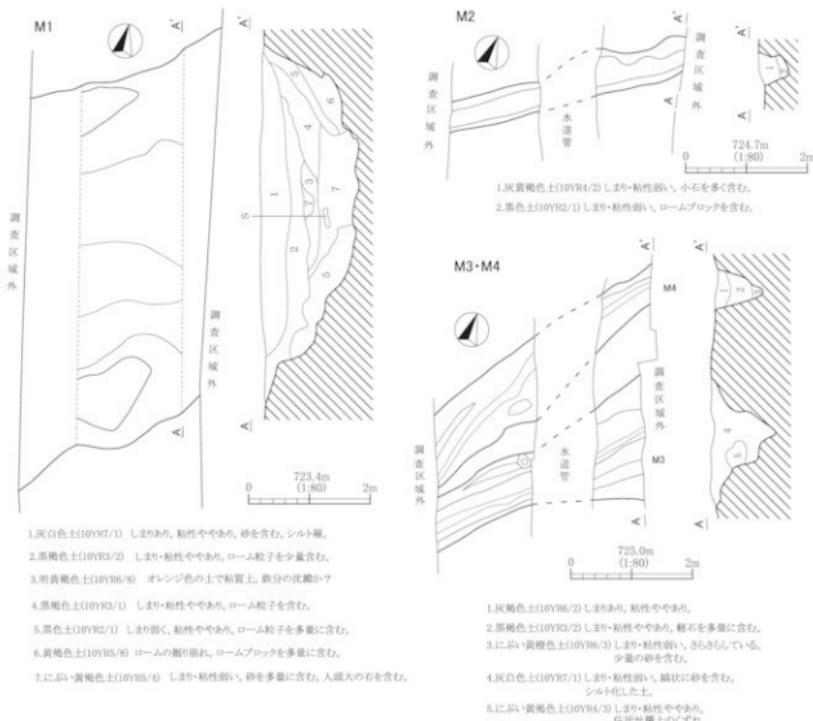
第5節 溝状遺構

(1) M1号溝状遺構

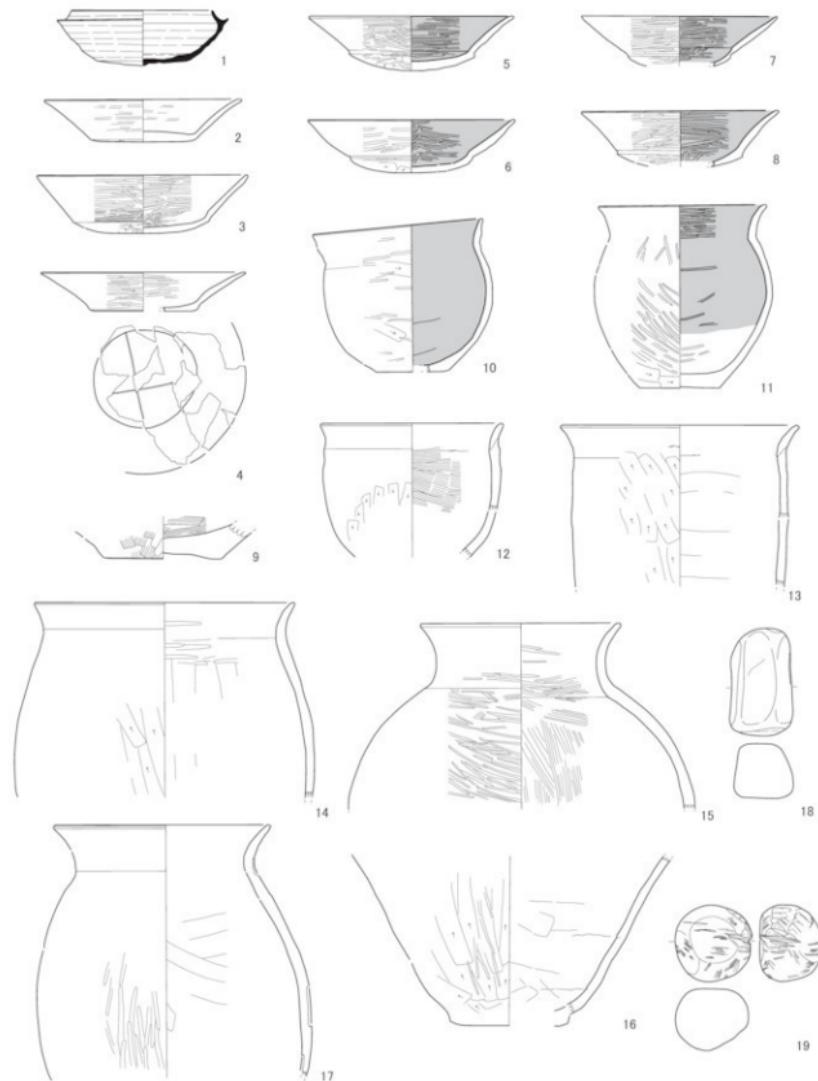
本址は調査区中央部のウー13~15、エー14Grで検出された。東西方に延びる溝状遺構で、規模は幅5.38m、深さ1.47mを測る。溝壁の立ち上がりは、北側に比べ南側が緩やかである。底面は凹凸があり、一部には水が流れたような痕跡があった。覆土は自然堆積であったが、図に示した7層は流水により形成されたと考えられる砂層が堆積しており、断続的な流水作用により溝が埋没していった状態を示していた。

本址からの出土遺物は非常に多く、特に溝底面の第7層からまとめて出土した。出土した土器類は、接合作業の結果、完形となったものは少なかつたが、摩耗等はあまり見られず、溝状遺構への流れ込みというよりは一括廃棄のような状況であった。図示したものは19点である。1は須恵器身の部分である。陶邑編年のTK43平行ぐらいに比定可能か。2~8は土師器壺である。いずれの壺も体部から口縁部が大きく外反するタイプのもので聖原遺跡分類の「壺H」に対応される。5~8は内面黒色処理が施されている。4は底部に焼成前のヘラ記号「×」が施されている。10~17は土師器壺である。10と11は内面黒色処理が施されている。18は磨り石。19は軽石製で、面取りも行われているが、深い切り込み状の凹もあり浮きの可能性もある。

これらの出土遺物は6世紀後半に位置づけられ、本址の形成も古墳時代頃と考えられる。



第19図 M1~4号溝状遺構実測図



第20図 M1号溝状遺構出土遺物実測図

1~19(1:4)

(2) M2号溝状遺構

本址は調査区中央部のエー8、オー8・9Grで検出された。東西方向に延びる溝状遺構で、規模は検出部分で3.98m、幅0.70m、深さ0.34mを測る。溝壁の立ち上がりは、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積で黒色土を主体とし、砂等は含まれていなかった。

本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土中から土師器甕4片、土師器壺3片が出土したのみであった。よって、本址の帰属時期は不明である。

(3) M3号溝状遺構

本址は調査区北側のキ-3、カ-3Grで検出された。北東から南西方向に延びる溝状遺構で、規模は検出部分で3.82m、幅1.60m、深さ1.00mを測る。溝壁の立ち上がりは緩やかに立ち上がり、溝底面は非常に幅狭く、いわゆる「V」字状を呈する。覆土は自然堆積であるが下層に砂を非常に多く含み、溝底面は流水の痕跡が確認できた。

本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土中から古墳時代中期の土師器高坏脚の破片と土師器甕片が出土したのみであった。よって、本址の帰属時期は不明である。

(4) M4号溝状遺構

本址は調査区北側のキ-3、カ-2Grで検出された。北東から南西方向に延びる溝状遺構で、調査区西側でM3号溝状遺構と交差すると考えられる。規模は検出部分で4.42m、幅1.12m、深さ0.70mを測る。溝壁の立ち上がりは緩やかに立ち上がり、溝底面は非常に幅狭く、いわゆる「V」字状を呈する。覆土は自然堆積であり、M3号溝状遺構と異なり砂は含まれていない。

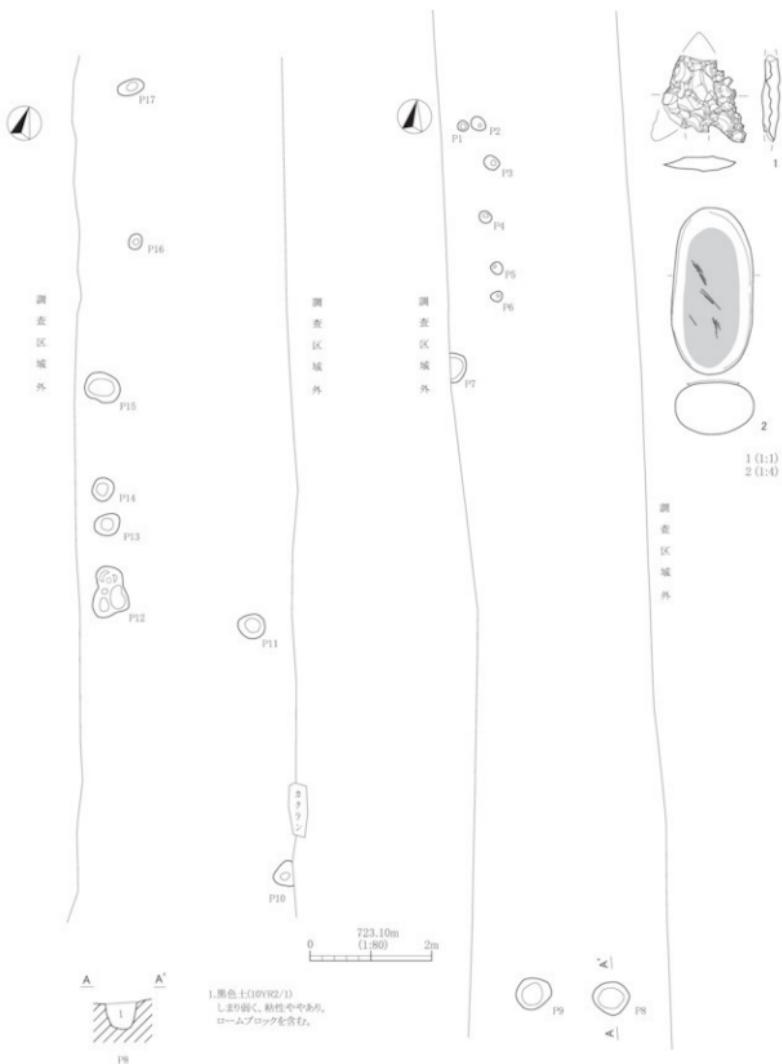
本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土中から土師器甕4片が出土したのみであった。よって、本址の帰属時期は不明である。

第6節 単独ピット

本址からは17ヶ所の単独ピットが調査された。形態・規模は以下の表である。

第2表 ピット計測表

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形 態	出土遺物	()推定 (単位 m)	
P1	ウ-16	0.16	0.15	0.12	円形		暗褐色土(10YR3/4)	
P2	ウ-16	0.25	0.21	0.28	円形		暗褐色土(10YR3/4) 砂が多い。	
P3	ウ-16	0.26	0.2	0.12	円形		黒褐色土(10YR3/1) 砂が多い。	
P4	ウ-16	0.19	0.19	0.1	円形		暗褐色土(10YR3/4)	
P5	ウ-16	0.21	0.2	0.23	円形		黒褐色土(10YR3/1)	
P6	ウ-16	0.18	0.15	0.16	円形		黒褐色土(10YR3/1)	
P7	ウ-17	0.48	(0.26)	0.14	不明		黒色土(10YR2/1)	
P8	イ-19	0.58	0.54	0.42	円形		黒色土(10YR2/1) ロームブロックが多い。	
P9	イ-19	0.58	0.5	0.41	円形	土師器甕	黒色土(10YR2/1) ロームブロックが多い。	
P10	エ-10	0.4	0.32	0.34	円形		灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性あり。 少量の砂を含む。	
P11	エ-9	0.42	0.38	0.34	円形		灰黄褐色土(10YR4/2) ロームが多い。	
P12	オ-9	0.84	0.56	0.44	不整形		灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性あり。 少量の砂を含む。	
P13	オ-9	0.46	0.34	0.21	円形		灰黄褐色土(10YR4/2)	
P14	オ-9	0.38	0.36	0.21	円形		灰黄褐色土(10YR4/2)	
P15	オ-8	0.58	0.46	0.32	椭円形		灰黄褐色土(10YR4/2)	
P16	オ-8	0.26	0.22	0.24	円形		灰黄褐色土(10YR4/2)	
P17	オ-7	0.44	0.25	0.35	円形	武藏甕片6点	灰黄褐色土(10YR4/2) ロームが多い。	



第21図 単独ピット及び遺構外出土遺物実測図

第3表 出土遺物観察表1

H1	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		指定道()残存部()丸底●	備考	出土位置
			口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	灰陶	瓶	(3.4)	-	(3.4)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	回転美術	I 区	
2	須恵器	壺	(3.2)	(3.3)	ナデ	ナデ 底面外周輪ヘラケズリ	回転美術	II 区		
3	須恵器	突巻文付 四耳壺	-	-	(23.7)	当真底	平行タキ目 突巻足付	回転美術	I 区・II 区	
4	土師器	壺	(3.0)	-	(4.2)	ヘラガキ	ロクロナデ	回転美術	I 区	
5	土師器	壺	(2.0)	-	(3.8)	ヘラガキ+縫文→黒色処理	ロクロナデ	回転美術	I 区・II 区	
6	土師器	瓶	-	6.5	(2.9)	縫文→黒色処理	ロクロナデ→回転系切引→高台足付	完全美術	II 区・横出	
7	土師器	瓶	-	5.4	(3.0)	ヘラガキ→黒色処理	ロクロナデ→右回転系切引	完全美術	I 区	
8	土師器	瓶	-	5.4	(1.1)	ヘラ記号あり	ロクロナデ→右回転系切引	完全美術	I 区ホリカ	
9	土師器	瓶	-	7.0	(2.2)	ヘラガキ→黒色処理	高台足付	完全美術	II 区	
10	灰陶	瓶	-	(6.6)	(5.5)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ→回転系切引→高台足付	回転美術	I 区	
11	土師器	甕	(22.0)	-	(18.8)	ナデ	ロクロナデ→右回転ヘラケズリ	回転美術	I 区・II 区・横出	
12	土師器	甕	(18.8)	-	(10.7)	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ	回転美術	II 区ホリカ・横出	
13	土師器	甕	(19.4)	-	(13.3)	ヘラナデ	ヘラナデ	回転美術	I 区・II 区・横出	
14	土師器	甕	(20.6)	-	(12.1)	ヘラナデ	ヘラナデ	回転美術	I 区・II 区	
15	土師器	甕	(15.6)	-	(8.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転美術	II 区	
No.	器 壓	瓦	材	體大長	體大幅	體大厚	體 量	所 見		出土位置
16	角鉢	鉢	陶製品	(9.2)	0.9	-	-	先端灰粗		II 区
H2	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		指定道()残存部()丸底●	備考	出土位置
			口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	須恵器	甕	(3.8)	(6.8)	(3.9)	ロクロナデ	ロクロナデ 直筋右回転系切引	回転美術	-	
2	土師器	甕	16.9	8.0	6.5	ヘラガキ	ロクロナデ→底部下端及び底部周輪ヘラケズリ	完全美術	-	
3	土師器	甕	(13.8)	(6.6)	4.5	ヘラガキ+縫文→黒色処理	ロクロナデ 既成右回転系切引	回転美術	-	
4	土師器	甕	(16.4)	-	(12.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転美術	-	
H3	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		指定道()残存部()丸底●	備考	出土位置
			口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	須恵器	甕	13.5	5.5	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 直筋右回転系切引	完全美術	I 区 No.1	
2	土師器	甕	-	-	-	ヘラガキ+黒色処理	ロクロナデ 異書	破片美術	II 区	
3	土師器	甕	-	-	-	ヘラガキ+黒色処理	ロクロナデ 異書	破片美術	II 区	
4	土師器	甕	(4.0)	-	(3.0)	ヘラガキ+黒色処理	ロクロナデ 異書	回転美術	I 区・横出	
5	土師器	甕	13.8	5.4	3.8	ヘラガキ+縫文→黒色処理	ロクロナデ 直筋右回転系切引	完全美術	II 区	
6	土師器	甕	(3.6)	(6.6)	(6.0)	ヘラガキ+縫文→黒色処理	ロクロナデ 既成右回転系切引	回転美術	D1 No.2	
7	土師器	甕	12.8	6.3	4.1	ヘラガキ+縫文→黒色処理	ロクロナデ 直筋右回転系切引	完全美術	I 区・II 区	
8	土師器	甕	(13.0)	(6.0)	4.6	ヘラガキ+縫文→黒色処理	ロクロナデ 既成右回転ヘラケズリ	回転美術	I 区・II 区	
9	土師器	甕	13.6	5.8	3.6	ヘラガキ+縫文→黒色処理	ロクロナデ 異書 正筋右回転系切引	完全美術	II 区	
10	土師器	甕	(12.0)	5.0	3.2	ヘラガキ+縫文→黒色処理	ロクロナデ 異書 右回転系切引	完全美術	II 区・横出	
11	土師器	甕	-	7.5	(3.9)	ヘラガキ+黒色処理	ロクロナデ 既成右回転系切引 高台足付	完全美術	I 区・II 区	
12	土師器	甕	(33.0)	8.4	4.9	ヘラガキ+黒色処理	ロクロナデ 既成右回転系切引	完全美術	I 区・II 区	
13	土師器	甕	(4.2)	(6.6)	3.1	ヘラガキ+黒色処理	ロクロナデ 既成右回転系切引	回転美術	II 区	
14	土師器	甕	0.71	-	(0.6)	ヘラガキ+黒色処理	ロクロナデ 既成右回転系切引 高台欠損	回転美術	D1+I 区・横出	
15	土師器	甕	(6.4)	6.3	5.6	ヘラガキ+黒色処理	ロクロナデ 既成右回転系切引	完全美術	II 区・試獣	
16	土師器	甕	12.9	4.9	4.0	ヘラガキ+黒色処理	ロクロナデ 既成右回転系切引	完全美術	II 区 No.2	
17	土師器	甕	(22.0)	-	(14.2)	ヘラナデ ハカ日	ロクロナデ ハカ日	回転美術	I 区・II 区	
18	土師器	甕	-	(8.0)	(11.2)	ヘラナデ	ロクロナデ ヘラナデ	回転美術	I 区・II 区	
19	土師器	甕	-	7.1	(8.7)	ロクロナデ	ロクロナデ 直筋右回転系切引	完全美術	I 区・II 区	
20	土師器	甕	(19.4)	-	(10.0)	ヘラナデ	ヘラナデ	回転美術	D1	
21	土師器	甕	-	4.5	(8.1)	ヘラナデ	ヘラナデ	完全美術	I 区・II 区	
22	土師器	甕	-	(0.6)	(1.1)	ヘラナデ	ヘラナデ	回転美術	I 区・II 区	
23	土師器	甕	-	6.4	(0.9)	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラケズリ	完全美術	I 区・II 区	
No.	器 壓	瓦	材	體大長	體大幅	體大厚	體 量	所 見		出土位置
24	鉄製品	鉢	9.7	(4.9)	0.4	脚身	脚身先端灰粗			II 区
T1	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		指定道()残存部()丸底●	備考	出土位置
			口径(奥)	底径(幅)	高さ(厚)	内 面	外 面			
1	灰陶	瓶	(17.8)	(7.2)	(6.3)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ→回転ヘラクツリ→高台足付 施釉	回転美術	横出	
2	土師器	甕	-	(7.0)	(3.0)	ヘラガキ	ロクロナデ→高台足付	回転美術	横出	
3	土師器	甕	-	(7.2)	(3.0)	ヘラガキ	ロクロナデ→回転系切引	回転美術	No.1	
4	土師器	甕	(12.8)	-	(10.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転美術	No.1 横出	
5	須恵器	甕	(16.0)	(6.1)	ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ 既成右回転ヘラケズリ	回転美術	No.2+ヤケ横出ホリ	
No.	器 壓	瓦	材	體大長	體大幅	體大厚	體 量	所 見		出土位置
6	磨石	安山岩	15.8	13.8	4.6	1.25kg	正面にすり面		No.6	
7	角輪	鉄製品	(2.5)	(0.5)	(0.4)	-	上面灰粗		0.7kg	

第4表 出土遺物観察表2

H5	種別	器種	法 量			成形・調整・文様			指定地()残存地()丸底()	備考	出土位置
			口径(奥)	底径(縦)	高さ(厚)	内 面	外 面				
1	灰陶器	盆	02.4	-	4.0	ハコナダ	ロクロナダ	自然釉付春	回転式面	H5	
2	灰陶器	杯	03.6	-	02.7	ロクロナダ	ロクロナダ→回転式ラケ(?)	回転式面	H5		
3	土師器	鉢	09.0	-	03.0	ハラナダ	ハラナダ	回転式面	H5		
4	土師器	杯	07.2	10.2	4.6	ハラガキ→黒色処理	ハラガキ→底部へラケ(?)	底部に赤鉻の文様	完全実面	H5	
5	土師器	瓶	-	5.4	03.1	ハラナダ	ハラナダ	完全実面	P1		
6	土師器	壺	-	(11.6)	07.8	ハラナダ	ハラナダ	ハラナダ	回転式面	H5	H5検出
7	土師器	壺	-	(9.6)	08.0	ハラ日→ハラナダ	ハラ日→ハラガキ	赤鉻	回転式面	H5	
8	土師器	甕	03.4	-	07.1	ハラナダ	ハラナダ	回転式面	H5	検出	
9	土師器	杯	02.4	6.9	13.0	ハラガキ→黒色処理	ハラガキ	完全実面	H5		
10	ミニチャウル器	土器	(0.2)	(4.7)	5.4	ハラ日→ハラナダ	ハラ日→ハラナダ	回転式面	H5		

No.	器種	実 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所	見	出土位置
11	磨石	石	11.5	7.5	3.4	380g	正面上に直面 右側に鏡打痕		No.2
12	磨石	石	11.0	4.6	2.8	155g	ナリ面 3		第2Kホ リカ方
13	白玉	滑石	0.7	0.75	<0.35	0.2g	丸棒 0.35 薄面欠損		H5

M1	種別	器種	法 量			成形・調整・文様			指定地()残存地()丸底()	備考	出土位置
			口径(奥)	底径(縦)	高さ(厚)	内 面	外 面				
1	灰陶器	杯	14.1	7.6	4.6	ロクロナダ	ロクロナダ→底部へラケ(?)→ラマ	完全実面	M1		
2	土師器	杯	(0.6)2	(0.6)	3.5	ハラガキ	ハラガキ	底部へラケ(?)→ハラガキ	回転式面	M1	
3	土師器	杯	17.3	11.0	4.8	ハラガキ	ハラ日→ハラガキ	底部へラケ(?)→ハラガキ	完全実面	M1	
4	土師器	杯	(0.6)8	(0.6)	3.2	ハラガキ	ハラガキ	底部へラケ(?)→ハラガキ	回転式面	M1	
5	土師器	杯	16.8	10.3	4.5	ハラ日→黒色処理	ハラガキ	底部へラケ(?)→ハラガキ	完全実面	M1	
6	土師器	杯	07.0	(10.0)	4.4	ハラガキ→黒色処理	ハラガキ	底部へラケ(?)→ハラガキ	回転式面	M1	
7	土師器	杯	(0.6)9	(0.6)	4.0	ハラガキ	ハラガキ	底部へラケ(?)→ハラガキ	回転式面	M1	
8	土師器	杯	16.2	10.3	4.6	ハラガキ→黒色処理	ハラガキ	底部へラケ(?)→ハラガキ	完全実面	M1	
9	土師器	杯	-	9.8	<0.9	ハラ日	ハラ日→ハラナダ	完全実面	M1		
10	土師器	便	04.0	(0.6)	12.1	ナダ	黒色処理	ハラナダ→ハラガキ	完全実面	M1	
11	土師器	便	03.0	6.5	1.5	ハラ日	ハラ日	底部外側へラケ(?)	完全実面	M1	
12	土師器	便	05.0	-	01.0	ハラ日	ハラ日	回転式面	M1		
13	土師器	便	09.0	-	(13.3)	ハラナダ	ハラナダ		回転式面	M1	
14	土師器	便	02.0	-	(06.1)	ハラナダ→ハラガキ	ハラケ(?)		回転式面	M1	
15	土師器	便	06.0	-	(13.3)	ハラ日→ハラガキ	ハラ日→ハラガキ		回転式面	M1	
16	土師器	便	-	(0.6)	(14.0)	ハラナダ	ハラナダ	完全実面	M1		
17	土師器	便	07.0	-	(20.8)	ハラナダ	ハラナダ	完全実面	M1		
No.	器種	実 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所	見	出土位置		
18	磨石	石	8.9	5.3	4.7	200g	全体に滑らか		M1		
19	磨石	粗石	6.3	6.3	5.1	99g	右側にV字状の条痕 ケーブル状の痕跡のころ 全体にナリ		M1		

遺物											
No.	器種	実 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所	見	出土位置		
1	石器	滑石	<1.8	<1.7	<0.3	0.8g	右側先端、平面、茎部欠損 断面状		試掘		
2	磨石	石	13.7	6.7	4.5	624g	正面にナリ面		検出		

第V章 調査のまとめ

今回の調査成果としては、まず第1点目として、台地内部にまで集落が広がっているが散村的な状況であることが確認されたことである。長土呂遺跡群は国道より東側の台地で聖原遺跡や上聖端遺跡などの調査事例から、台地全面に古墳時代後期から平安時代の集落が展開していることが確認されている。しかし、国道141号の調査では台地全体には集落が広がらず、散村的な集落状況を示し始めていた。今回の調査でもこの事が確認された。また、今回の調査地点から100m程北側の試掘結果でも古代の集落は確認されておらず、今回の調査地点付近から北側の台地には集落が展開しない可能性が指摘できる。

第2点目の成果としては、標準土層の項でも述べたが、調査区周辺に広がる砂層の形成時期についてである。今回の調査成果では9世紀後半～10世紀前半のH1号住居址がこの砂層を切り込む状態で構築され、これとは逆に、6世紀後半代のH5号住居址やM1号構造遺構などは砂層に覆われた状態で検出されている。これらの事から、これら砂層が同一時期の一度の堆積によるものかは検証できていないが、6世紀後半以降から10世紀前半までに形成されたであろうことが推定できた。今後は形成時期の確定や、その広がり等を検証し、いわゆる「仁和の大洪水」も含め、自然災害の認識や遺構の時期確定に資する資料としていくことが課題である。



遺跡周辺写真(平成6年 株式会社こうそく撮影)



北側調査区全景(北より)



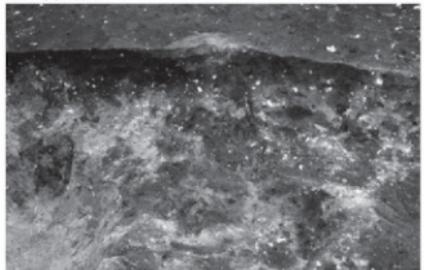
南側調査区全景(北より)



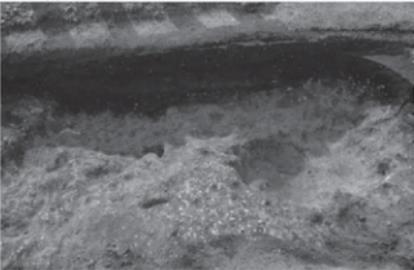
H1号住居址



H1号住居址掘方



H1号住居址カマド



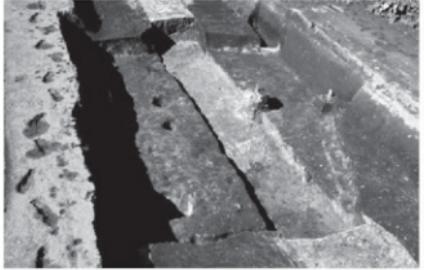
H1号住居址掘方



H2号住居址



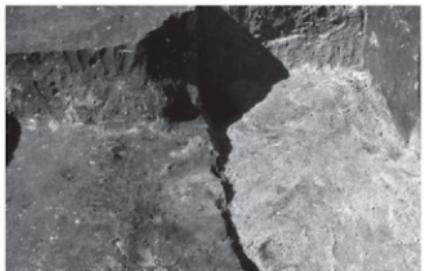
H2号住居址掘方



H3号住居址



H3号住居址掘方



H3号住居址カマド



H3号住居址出土鉄製品



H5号住居址



H5号住居址第2床面



H5号住居址掘方



H5号住居址覆土堆積状況



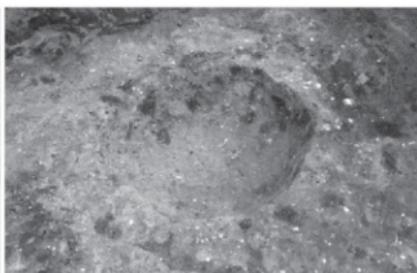
H6号住居址



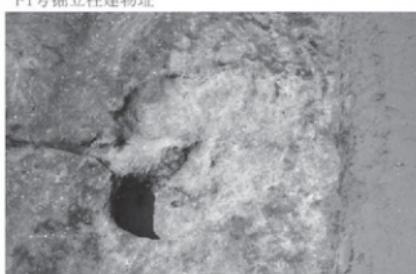
H6号住居址掘方



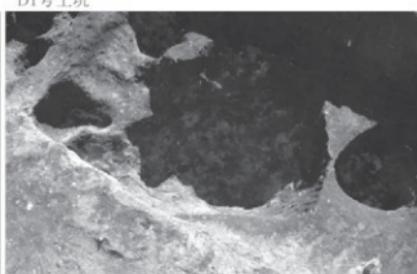
F1号掘立柱建物址



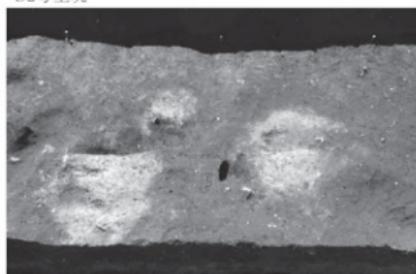
D1号土坑



D2号土坑



D3号土坑



T1号特殊遺構燒土檢出狀況



T1号特殊遺構掘方



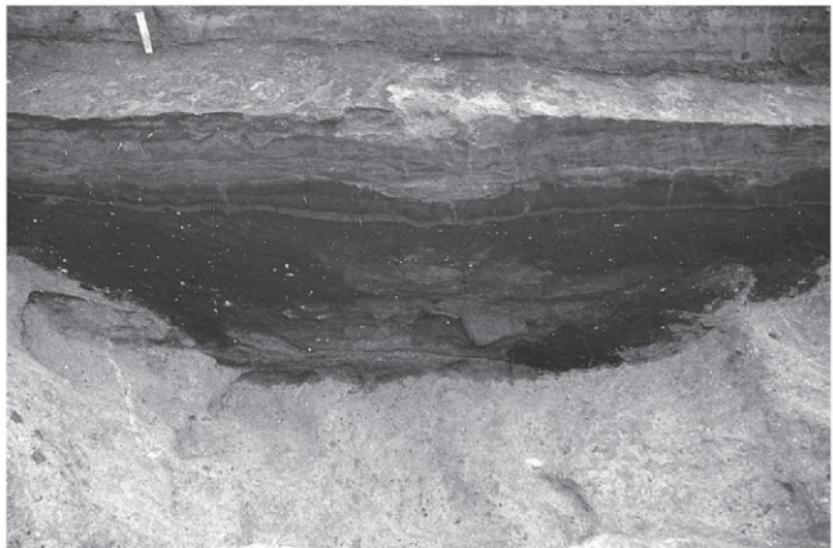
M2号溝状遺構



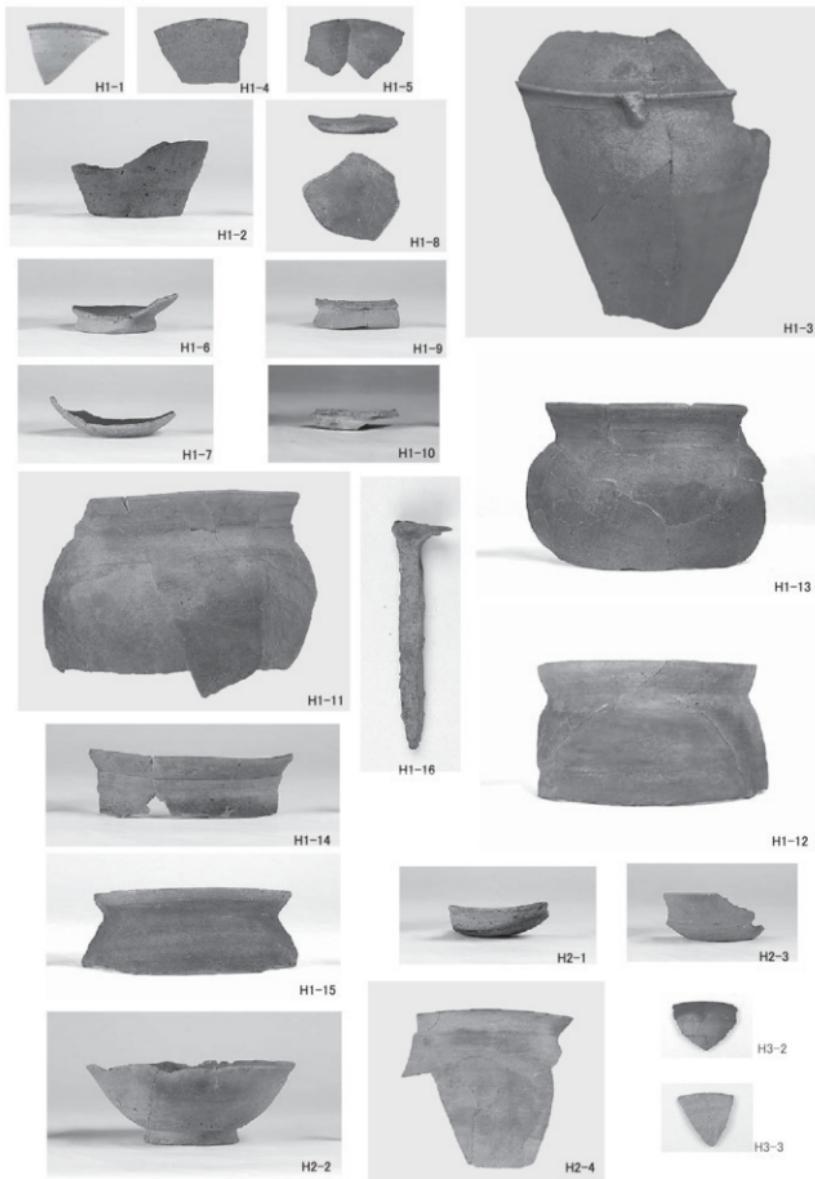
M3.4号溝状遺構



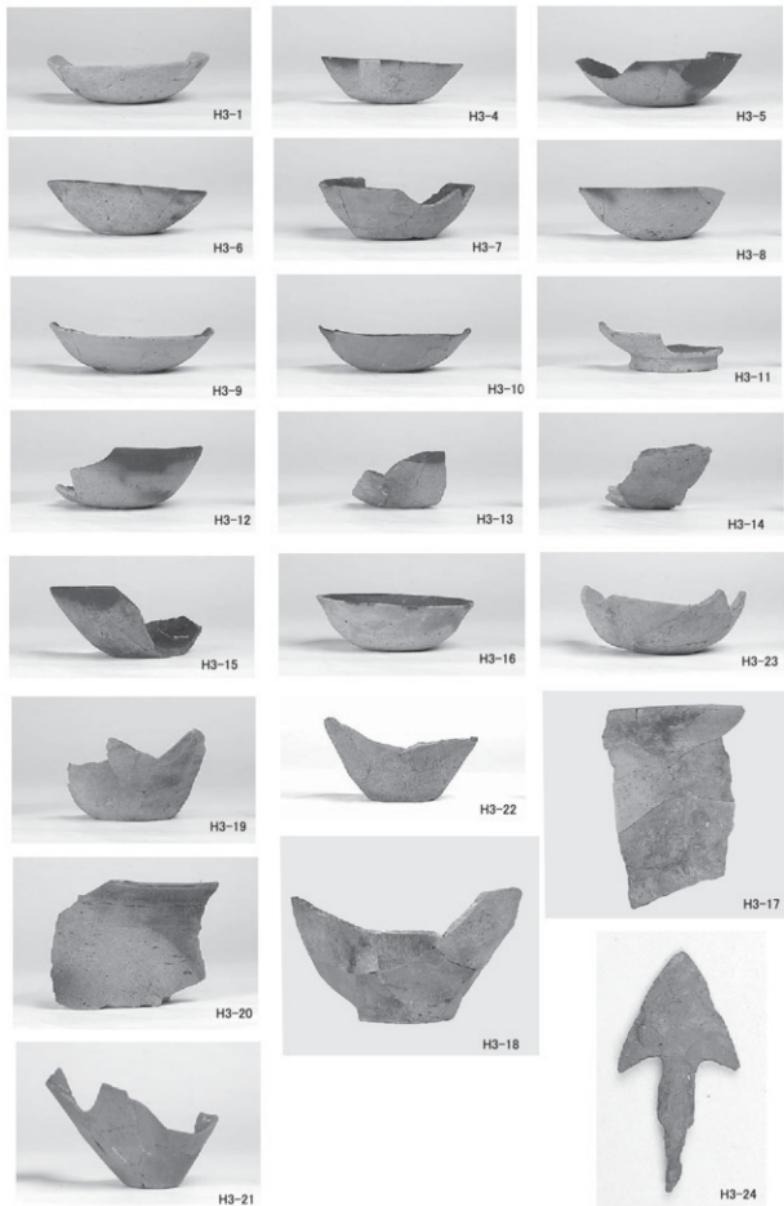
M1号溝状遺構



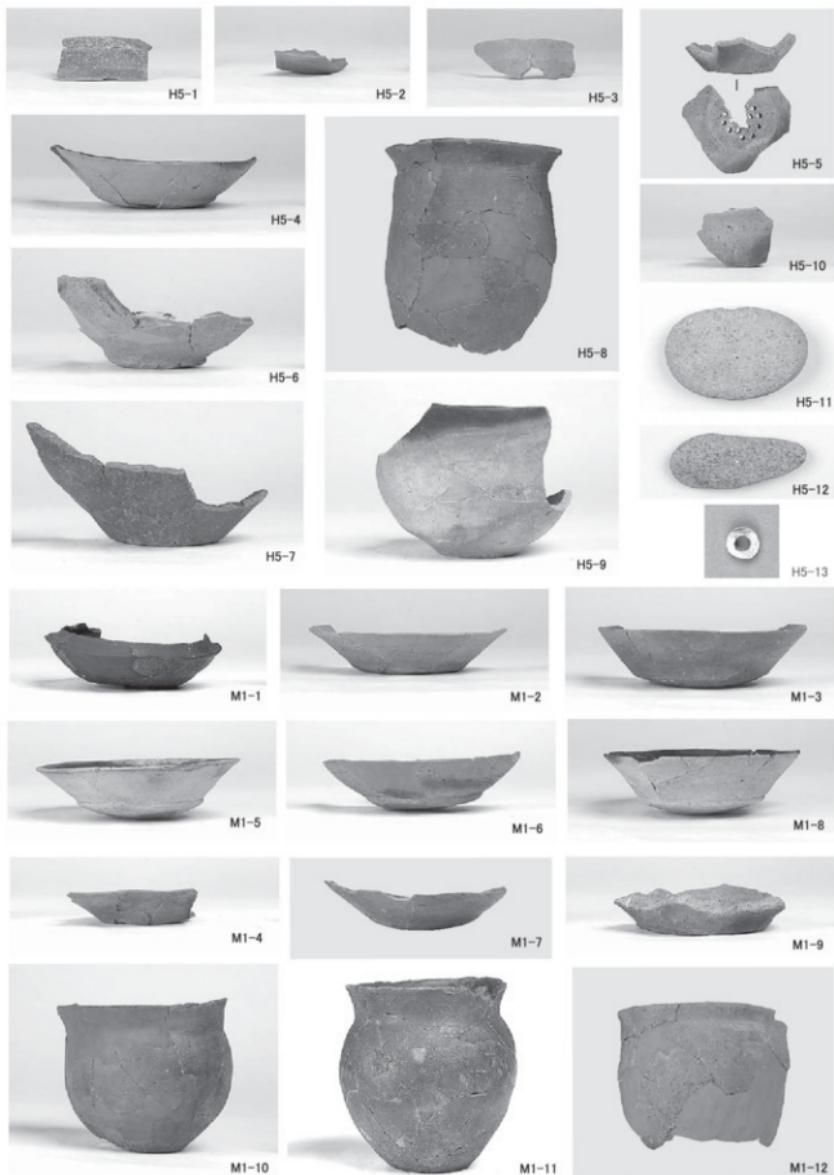
M1号溝状遺構覆土堆積狀況



図版七



図版八





M1-15



M1-17



M1-14



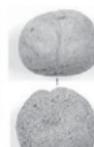
M1-16



M1-13



M1-18



M1-19



M1-16



T1-2



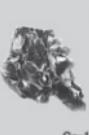
T1-3



T1-7



T1-1



Gr-1



Gr-2



T1-6



T1-4

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第237集
長土呂遺跡群 下聖端遺跡V
平成28年(2016) 3月
編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
文化振興課 文化財事務所
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL0267-68-7321
印刷所 キクハラリンク有限会社

報告書抄録